二次元ぷち文庫

試し読み版

閃光のジュリオ

荒野の惑星

Flash Julho
Planet of the Wilderness

大熊狸喜

表紙イラスト：明地雫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『閃光のジューリュ　荒野の惑星』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

閃光のジュールー
Flash Julho
Planet of the Wilderness
荒野の惑星
大熊狸喜
表紙／明地雫
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ジューリュ・ホワイト

賞金稼ぎを生業とする女ガンマン。ショートカットで男勝りだが、プロポーションは惑星ピカー。狙撃と早撃ちに天才的な才能を持ち、あだ名は「閃光のジューリュ」。正義感が強く、責任感も強く、負けず嫌い。女である事を特に自覚はしていないが、イヤらしく女扱いされるのは嫌い。

トーティ

調子のいい情報屋。口八丁手八丁で生き延びているが、情報や武器調達の腕は確か。

ボーギャン

異星人の犯罪者で、数人の子分を束ねているリーダー的存在。これまでに何人もの女ガンマンを返り討ちにし、犯している。

西暦三四五六年、地球は一つの惑星国家として、宇宙惑星連合に所属していた。
様々な異星人と交流を持ち、地球上には多種多様な地球外の文明人が生活をしている。
地球人類も別なる惑星へと移住をし、世代を重ねていた、そんな未来世紀――。

地球から遠く離れた、惑星ビンビル。
かつて観光型の星として開発されていた、連合所属の惑星で、太古の地球の「西部開拓時代」をモチーフとした、娯楽の星だった。
独立国家であるが、しかし、過去の侵略や惑星戦争などの影響で、現在は開発も観光も完全に崩壊している。
更に、宇宙の犯罪者などが逃げ込んでくる事も要因となり、治安も極度に悪かった。
そんな惑星ビンビルにある、自治区の一つ、乾いた砂塵吹く街、ストーンシティー。

岩と砂の街は今、不条理な暴力に踏みにじられようとしていた。
酒場の娘を人質に、三人の男たちが金を要求しているのだ。
「へヘッ、マスターさんよう……とりあえず有り金全部、戴いていくぜ！」
リーダーらしい、筋肉質な緑色の異星人が、金髪麗しい少女のこめかみに銃口を充て、更に露出させた乳房を揉みしだいている。

「ひっ――すん……助けて、マスター……」
命を握られたに等しいドレスの少女は、不当な暴力に対し、泣きながら助けを乞う事しかできない。
店内にいる数人の客も、銃を向けられて怯えるばかりだ。
手下らしい二人の男。
四本腕の異星人は、客たちや初老のマスターに銃を向けて、威嚇をしている。
ヘビのような顔をした異星人は、袋に金貨を詰め込んでいた。
わずかな稼ぎを全て奪われながら、酒場のマスターは少女の身を案じる。
「金だったら全部くれてやる。だからその娘を放してやってくれ……っ！」
必死の勇気を振り絞っている事は、震えている言葉尻で解る。
そして卑劣な略奪者たちは、そんな弱さを笑って、付け入る。
「ケッヘヘ、これっぽっちの金じゃ、酒代にもなりゃしねぇやな。ねぇアニキ」
「足りねぇ金の替わりに、その姉ちゃんを貰ってきましょうぜ！」
金を手に入れた手下たちは、ヘラヘラと笑いながら、ベビーフェイスの売り子をイヤらしく睨みつけた。
そして、少女の胸を弄ぶ強盗のリーダーは、鈍く光る銃口をマスターに向ける。
「そういう事だ、マスターさんよ……じゃあな！」

射殺の引き金が引かれようとした時、酒場の扉が乾いた音を立てて開かれた。
――ギギ……キィ……。
風と共にやってきたのは、腰に二丁の銃を下げた一人の女。美しく澄んだ声が、木造の店内に堂々と響きわたる。
「おやおやぁ？　ココは酒場のはずなのに……クズ犯罪者の、ドブみたいな匂いがプンプンするよ」
あきらかな挑発をしながら、声の主は店内を見回した。
突然現れた女ガンマン。強盗たちは新たなエモノにニヤける。
「なんだぁ、お前は……ケッヘヘ」
両開きのドアにヒジをかけた女は、頭に乗せたテンガロンハットを指先でツイと上げた。
その顔を見たマスターは、まるで救世主を見るような、安堵と希望の笑みで、女の名を呼ぶ。
「あなたは……ジューリュ！」
ジューリュと呼ばれたその女は、十八才の少女らしい、あどけなさを残していた。
ライトブラウンの髪は少年のようなショートカットで、覗けるツリ目は透明な海の如く、明るい緑。
細く通った鼻筋と小さな唇が、丸い小顔にバランス良く収まっていた。

均整のとれた美しいボディは、極々薄い袖なしのハイレグタイツに、隙間なくピッタリと包まれている。
ツンと丸く上を向いている、八十一センチDカップのバストと、キュっとくびれた五十八センチのウェスト。
そしてタップリと広がる八十四センチのヒップが、まるで濃紺色のボディペインティングのように、魅惑的な曲線美を魅せつけていた。
上半身は袖なしの革ジャケットを羽織っているが、丈は短く、肋骨の辺りまでしかない。抱くと折れてしまいそうなウェストも、全く隠れていなかった。
ローライズで、腿の付け根まで剥き出しになるほどの、極ショートなジーンズを穿いている。
腰には男性物のようなゴツいガンベルトが巻かれていて、左右には二丁の銃が下げられていた。
上下丈の短いジーンズからは、腰骨どころか脇腹にまで切れ上がった、大胆すぎるハイレグのラインが露出している。
ローライズとハイレグの間は、腰や脇腹からTバックお尻までの白い艶肌を、ぐるりと覗かせていた。
首には赤いスカーフ。更に指ぬきの長い革手袋とウェスタンブーツを身に付けていて、

ヒジ充てとヒザ充ても装着している。
外見は旧世紀の地球文明のそれだが、全ての衣服はビームコーティングが施してある。
それは当然、手持ちの武器がビームガンだからであり、これも宇宙の常識だった。
そして左の胸には、星形の金バッジ。
それはバウンティーハンター、賞金稼ぎの許可バッジだ。
女の名前を聞いた強盗団は、ハッとして、更にイヤらしく醜顔を歪めた。
「ジューリュ……そうか、てめぇが有名な女賞金稼ぎ、『閃光のジューリュ』か！」
「ふん、クズに名前を覚えてもらったって、コレっぽっちも嬉しくないねぇ」
美しすぎる少年にも見える、端正な外見。
それに似合わず、言葉はガサツだ。
一方で、若くて麗しくて雑な女バウンティーハンターに、強盗団は卑猥な事を想像したらしい。
緑色のリーダーが、ゴリラのように笑う。
「ビッヒッヒヒ、中々の上玉じゃねぇか……ノして犯して、楽しませてもらうぜっ！」
言うが早いか、三人の男は一斉に銃口を向ける。
しかし同時に、賞金稼ぎも動いていた。
――つザっっ！

「そぉら、ほぅらぁっ！」
——ビヒュッ、ヒュビュンッ！
「あぐぅっ——ぐはぁうっ！」
——ビシィィンっ、ッパシィイインっ、バパシィィンンっ！
大の字に拘束された肢体が、ムチの乱打でビクっビクンっと跳ねる。
二つの巨乳が左右別々に上下させられ、打たれたお尻がプルっと揺れた。
星空に抱かれた岩山に響きわたる、ムチの音と少女ガンマンの悲鳴。
——ッビシッバシィッ、ヒュパシィッ！
「っぎゃうぅっ——ぎひいぃぃっ！」
（いいっ——ぃ痛いぃぃっ——このぉっ——ゃめろおぉぉっ——っ！）
激痛の度に意識が途切れて、一瞬目の前が暗転した。
全身の肌には汗が浮き、スベスベの腕や剥き出しの腿に、赤い痕が残される。
そして薄いボディスーツが、引き裂かれてゆく。
——っビシィっバシィンっ、ビリリっ！
「ぎゃはうぅっ——ぁああぁぁっ！」
裂けたスーツから細い背中が、更に縦長のヘソが剥き出しにされた。
——っビリィィっ！

えっちシーン試し読み ここからスタート！

「っあうぅっ――っ！」
更に胸部が破かれると、左の乳房が露出させられる。
（む、胸が……っ！）
誰にも見せた事のない、白い乳肌と桃色の乳首が、牡たちの邪眼に晒された。
こぼれた片乳がタプンっと揺れると、異星の男たちから淫猥な野次が飛ばされる。
「ヒョウヒョウ、ジューリュ様のパイオツだギィッ！」
「もっと見せろダァ、ダッへへへ」
「このっ――ぁぐあぁぁっ！」
恥辱に反論しようとするも、抵抗は更なるムチ打ちで封じられてしまう。
拘束された賞金稼ぎの足下には、引き裂かれた衣服が、残骸となって散っていた。
もはやローライズもボロボロで、ガンベルトにぶら下がっている状態だ。
そして涎を垂らして興奮した男は、トドメの宣言をする。
「これで終いだぁっ！」
――ヒュシュンッッ、っっビシイィィィンンっっ！
「――っぎゃはあああぁぁぁぁっ！」
尻を強く叩かれて、ジューリュは背筋を限界まで仰け反らせた。
あまりの痛みに両目が開き、目の前が暗転。

開かれた唇からは、濡れた舌が差し出される。
「――っぁ……はか……あぅ……」
涙と涎がパっと溢れ、数瞬だけ肢体が痙攣をした。
痛みの頂点を通過すると、全身がグッタリと脱力する。
大の字拘束された肢体には、布きれと化したボディスーツと、ボロボロにされたジャケットと、ローライズだけが纏わされていた。
ブーツや手袋はワザと残されていて、それが露出した肌を、かえってエロティックに引き立てている。
「あぁ……はぁ、はぁ、はぁ――ぇ……？」
そして打たれた肉体は、痛みとは別の感覚を感じさせられ始めた。
――とくん、とくん、とくん……。
（か、身体が……なに……さ……）
赤いムチ痕がジクリと疼く。更に肉体内部が、トクトクと熱を高めてゆく。
痛みの中にいるはずのに、頬が上気し、まぶたが重く溶かされる。
（からだが……変だ……！）
痛みではなく、切ない熱の欲求で、肉体をくねらせられる。
処女が意識すらした事のない、女体最奥の子宮が、クツクツと媚熱を帯びてゆく。

ムチ打ちの刑に処された女ガンマンの変化を、巨漢の犯罪者はイヤらしく笑った。
「ブッフェフェフェ……身体が疼いて疼いて仕方がないだろう？」
再び、黒いムチをベロリと舐める変質者。
「コイツには強い媚薬が、タァップリと仕込んであんのさぁ」
「なに……ぁうぅ……！」
牡たちの視線が、遠慮なく肌に刺さる。
ジャケットの下から覗ける乳首を視姦されると、その刺激だけでキュウ……と硬化した。
肉体の変化を、下司なダグール星人やドレッド星人に揶揄される。
「ゲヘヘ、乳首をおっ立ててやがるダァ！」
「ムチ貰って興奮だってよぅ、ギッギギ」
（こんな……連中に……！）
しかし抵抗する意志とは裏腹に、見られている肉体は更に淫熱を高め、無意識にも腰を引いてしまう。
まるで、弱々しい少女のように。
「ブッフェフェフェ」
太った男が再び小さくムチを振るうと、ガンベルトのバックルが破壊される。
――ヒュッ、バヂリっ！

ベルトを失ったローライズがバサリと落ちると、ハイレグスーツに包まれた下半身が露出させられた。
鍛えられて引き締まった下腹部が、魅惑的なラインを見せている。
「ブフェフェ、いい身体だぜ。マ〇コの締まりも良さそうだぁ」
「くうぅ……っ！」
スーツが食い込んだ股間には、柔らかそうな割れ目がクッキリと浮いていた。
ムチを腰に収めたボーギャンが、ニヤニヤしながら近づいてくる。
片手で自分のジッパーを降ろすと、巨大な勃起が頭を突き上げた。
「うわあっ――うぅ……っ！」
初めて見せられた男性器に、処女ガンマンは思わず顔を逸らしてしまう。
ボーギャンの陵辱ペニスは、牧場の杭のように長く野太く、淫水灼けで黒かった。
亀頭部分は拳みたいに大きくて、本体もゴツゴツと節くれだっている。
太い血管でビッシリと覆われていて、ビクンビクンと脈打っていた。
その姿は処女にとって、まるで砂漠に潜む毒蛇のようだ。
（あ、あんな……モノが……！）
嫌そうに顔をそむけた乙女の反応も、汚れた醜男には楽しいのだろう。
「さぁて、そのスーツの下はどうなっているのかなぁ？」

「くっ、来るなっ――あぁっ！」
力ない威嚇は、笑われるだけ。
身体を揺すって抗うものの、当然、難なく背後をとられた。
肥えた男の脂っぽい掌で、細いお腹を抱かれる。
背後から樽のような出腹に抱き寄せられると、白いうなじがゾクリと逆立った。
更に、腰に残ったスーツの残骸が、犯罪者の指に握られる。
「んぎっ――やっ、放せぇ……！」
「ん～ん……女の抵抗する声ってのは、いつ聞いても心地いいぜぇぇ」
異星の、脂肪な醜男に変質的な言葉を吐かれながら、ジューリュは極薄スーツを一気に引き裂かれてしまった。
――っビィィィィっ！
「あぁっ――っ！」
大の字拘束で開脚させられた女の腰が、裸にされて全てを晒される。
更に背後から、靴底でお尻をググっと押された。
「やっ、ゃめろっ――ぁあぁぁ……っ！」
縄で縛られた手足が伸ばされ、股間を前方に突き出す格好にされる。
そして牡獣たちの淫邪な視線が、秘すべき肉割れへと注がれた。

更に頭を後ろに引かれ、立ヒザ姿勢から放尿姿へと、ポーズを変えられてしまう。
「いたいっ……は、放せっ――ぁぐぅっ！」
――ガプっ！
そして抵抗する女の口に、自身の銃が突き込まれる。
「――ふぐぶっ！」
両掌を背後に縛られた女賞金稼ぎは、奪われた自分の銃を、口内に押しつけられてしまったのだ。
金属の冷たさと、血の匂いに似た鉄の味が、口内に広がってくる。
（こ、このまま――撃たれたら……っ！）
絶体絶命の危機。一方的な死の予感に、背筋が冷たくなる。
中性的な凛々しい顔が恐怖で曇り、眉間に影が落ちた。
女の危機が大好物の汚れたボーギャンは、心底楽しそうだ。
「ブッフェフェ、い～い顔だなぁ。やっぱり女の口ってのぁ、咥える様が一番だぜぇ」
そう言いながら、突き込んだ銃をグリグリとこね回す。
「ひゃめっ……はぐぅっ――キヒョウ……っ！」
（こ、殺される……！）
引き金にかけられた男の指に、力が込められる。

えっちシーン試し読み ここからスタート！

――ギリリ……。
死が近づく。恐怖で焦燥させられる理性。
「ひゃぐっ――はめろぅ！」
「心配すんな。お前が死んだら、女は街で手に入れらぁ」
冷徹に笑うボーギャン。引き金は更に絞られる。
――ギリ……。
「――ひくひょうっ、ひくひょうぅっ！」
どうしようもない恐怖に脚が震え、知らずに涙が一筋こぼれる。
思わず目を閉じそうになった時、醜いタール星人が残酷な引き金を引いた。
「あばよ、女ガンマン」
（――っ死ぬっ！）
一瞬でさせられる、死の自覚。そして。
――カチリっ――パチュンっ！
（――っ!?）
「――っんごくんっ!?」
ノドの奥に、何かが当たった。まるで強めの水鉄砲みたいな、液体噴射の感覚。
「ブッフェフェフェ、一発目はビームじゃねぇやぁっ！」

大笑いする犯罪者たち。一方で、命を拾ったジューリュは、放心していた。
「――は……はぁあぁ……」
限界まで追い詰められた精神が解放された途端、肉体が安堵する。
「……ぁ……」
精神が弛緩させられると、無意識にも失禁をしてしまった。
――ちょろ……ぢょろろろろろ……。
(や、やだ――とまらないぃ……っ!)
両掌と首を縄で縛られた女ガンマンは、倒すべき男たちの前で、放尿姿を晒してしまったのだ。
そんな恥ずかしい有様を、淫猥な男たちが見逃すはずがない。
「ギッギギ、おいおいマジかぁ?」
「あのジューリュが、おれたちの前でションベンしてるダァっ!」
「ヂュウゥッ、恥ずかしい姿だぜぇっ」
下品な犯罪者たちに、ワザと大声で囃し立てられ、心が更に恥辱で責められる。
(……ち……チク、ショー……!)
足下に溜まる屈辱の和合液に、更に羞恥の尿液が、小さな池を造り上げた。
「はぁ、はぁ――あぁあっ……!?」

そして放尿ショーを終えた途端、肉体には更なる変化が起きた。
ノドが熱く、渇き、そして再び子宮が淫熱を上げたのだ。
「な、なにさ……からだ、が……！」
口内と胎内が強い飢餓感に灼かれ、身体が切なくくねる。
頬が上気し、牡に性欲を訴えるように、瞳が潤む。
「ルーレットのうち一発はビーム弾だが、あとの五発は強力なエロぐすりだぁ。コッソリ仕掛けたのさ」
「なっ――⁉」
さっきノド奥に当たった放水は、強力な媚薬だったのだ。
男は更に言葉を続ける。
「しかも一度発情したが最後、男の精液を貰わなければ、肉体の疼きは収まらねぇ」
「そ、そんなっ――ぁはあぁ……！」
ボーギャンの言葉を証明するように、女体は更に飢餓感を訴えてきた。
（か、からだが……狂う……っ！）
子宮の熱が全身に及び、皮膚がビリビリと過敏に痺れる。
さっき教えられた、太くて長くて堅い弾力を持つ熱い肉棒。
あれが欲しくて、堪らない。

「はひ……はひぃ……こ、んなぁ」
上体がフラフラと揺れて、Dカップの双乳がプルムと弾む。
――とくんとくん、とくんとくん。
心臓が早鐘を打ち、白い肢体が上気に染まった。
肌の表面が恥汗を浮かせて、秘裂の粘膜からも蜜が溢れている。
裸の腰までが無意識に、拙く淫らに前後していた。
(ほ、欲しい……おとこの……!)
足下に溜まるスペルマ液の放つ汚臭が、この世で最上の美香に感じる。
ノドに淫薬を受けたせいか、一刻も早く牡肉を舐めなければ、気が狂ってしまいそうだ。
そんな銃撃少女に、ドレッド星人が近づいてきた。残る二人に宣言をしている。
「ボスの次は、オレだ」
男はズボンのジッパーを下ろし、ガチガチに天を向いた一物を露出させていた。
「コイツが欲しいだろう、ギッヒヒ」
「……ぁ……」
見せられたモノは、太さは標準だろう。しかし色が艶めく黒色で、異様に長い。
歩く度に、重たそうにブルッと揺れる。
――あれなら、ノドの奥まで……。

無意識にそんな事を思ってしまうと、思わずノドが鳴っていた。
「……こくり……」
鼻先まで近づけられると、ペニス特有の熱っぽい生臭さが匂ってきた。
「うぐ……臭い……っ！」
たぶん数日は洗っていないだろう、汚れた男性器。
尿と汗と小便を煮詰めたような、異様な臭気を放っている。
嘔吐感が湧き起こり、生理的な嫌悪感で顔をそむけたい。
それなのに。
（臭い、のに……ほしぃ……！）
まぶたが下がり、頬が熱く染まる。
嫌悪する犯罪者の汚れたペニスなのに、視線がからめとられて、離せない。
「欲しけりゃあ自分で咥えるかい？　ギッギッギ」
「だれ……が……！」
女ガンマンの意志は抵抗しながら、しかし肉体は、自ら唇を近づけていた。
（や、やめろっ……あたしっ！）
故郷の星を喰いモノにする犯罪者の汚い男性器を、口に含もうとしている自分が、信じられない。

「はぁ……いやだ……っ！」
牡肉に触れる寸前、強靭な意志が働いて唇が躊躇する。
そんな抵抗が、汚れた男たちには何よりの楽しみだ。
「ギッヒヒ、女のクセにノロノロすんな！」
そう怒鳴られると、ショートカットの前髪を乱暴に掴まれた。
強い力で引っ張られると、再び開脚のヒザ立ち姿勢にされる。
「いたいっ――ぁぐむっ！」
そして不潔な剛直を、一気にノド奥まで突き込まれてしまった。
――っぐプぢゅるっ！
「んぐんんーっぎゃぷっ、むぐげぅっ！」
熱い肉棒でノドを押され、反射的に嘔吐の声が溢れる。
数日は洗浄していない男性器が、舌に乗せられて唾液に濡れる。
（くっ――臭いぃっ！）
牡の垢とツバが混ざると、脂ゴミのような腐臭で口内が満たされてしまう。
しかし、一方で。
（こんな……クラクラ、するぅ……）
淫液を打たれた女体が、牡独得の性臭を、吸気の限りで嗅ぎ取っていた。

（いやだ……ぃい、匂いぃ……！）
ろくに嗅いだ事すらない精液の匂いなのに、女の身体が本能で求める。
飢餓感に喘ぐ聖宮が、早く戴けと自らの女体を、急かすのだ。
――この逞しい勃起に奉仕すれば、また臭い精液を貰える。
そんな歪んだ欲求に突き動かされて、女ガンマンは賞金首のペニスに、濡れた舌を這わせ始めた。
「ぁあむ……んちゅ、レろちゅ……」
――ぢゅルつ、ヂゅぷレロ、ちゅぷヂゅぷつチゅ。
銃弾を受けた傷口のように、熱い肉塊。
脈打つ裏側を舐めて、複雑な起伏の本体を一周し、再び亀頭部の裏側まで、拙く愛撫。
（やめろ……ぁたしぃ……っ！）
仁王立ちする犯罪者の不潔な男性器を、ヒザ立ちで口内奉仕。
惨めで悔しいのに、女の舌は勝手に愛撫を捧げ続けた。
「嫌がってる割には、随分とご熱心なフェラだなぁぁ、ギギッ！」
「んん……られがっ――んっんっ……」
口では抵抗するものの、犯罪者の言った通り、淫液を打たれた肉体は早く精液が欲しくて堪らない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/